



新たな学習交流拠点を目指して

－神田外語大学附属図書館の取り組み－

神田外語大学 附属図書館 課長 吉野 知義

1. はじめに

近年、大学図書館は基本的かつ本来的な図書館としての機能は維持しつつも、大学におけるその役割の見直しと運営面の変革が必要であると考えられる。

平成22年12月には、「大学図書館の整備について（審議のまとめ）－変革する大学にあって求められる大学図書館像－」が文部科学省によって報告され、これからの大学図書館の方向性が多面的に検討され始めた。その後、平成23年12月には「大学図書館における先進的な取り組みの実践例－大学の学習・教育・研究活動の質的充実と向上のために－」がまとめられ、国公私の設置区分を超えたさまざまな大学図書館での取り組みが報告された。その後も同様の取り組みが進み、最新のものは「大学図書館における先進的な取組の実践例（Web版）」としてそれらの内容を見ることができる。キーワードとしてはラーニングコモンズ、アクティブラーニング、ICTの活用、学生協働などが目立ち、学生同士または教職員とのコミュニケーションによる活動が目立つ。

本稿では、ここで報告された事例を参考にしつつ比較的小規模な文系単科大学である本学図書館での事例を紹介し、図書館の年間入館者数20%超の増加という具体的な成果へとつながった新たな学習交流拠点を目指す基本ともなる取り組みを理解いただきたい。

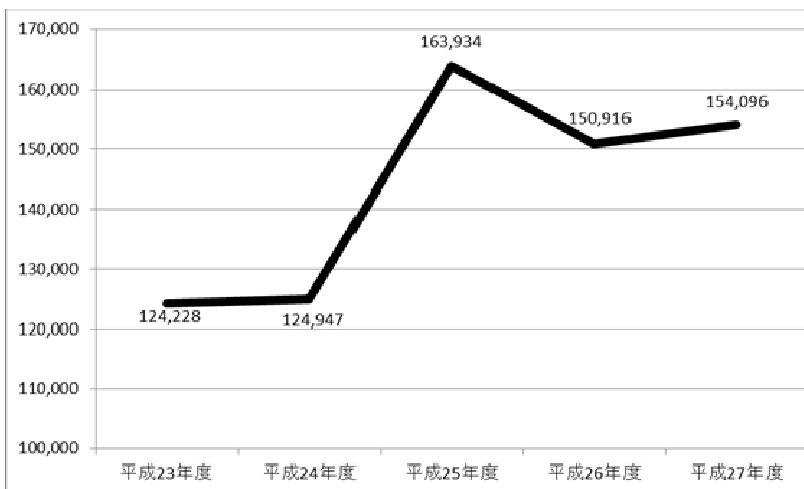


図1 年間入館者数の推移

2. 神田外語大学について

本学は、昭和 62 年に設立された外国語学部のみ単科大学であり、千葉県千葉市（幕張）にキャンパスを置いている。平成 28 年度の学部の在籍学生数は 3,886 人で、英米語学科、アジア言語学科、イベロアメリカ言語学科、国際コミュニケーション学科で構成されている。

「一人ひとりが言葉を通じたコミュニケーションにより、お互いを認めあい尊重しあう、あたたかな世界をめざします。」を大学のビジョンとして掲げ、コミュニケーションは外国語教育の根幹をなす重要なものとして位置づけ、英語をはじめとする様々な言語でのコミュニケーション力の確立を軸として大学教育を進めている。

また、平成 20 年に現在の図書館が 7 号館の 1 階部分「学習空間としての図書館」をコンセプトとして新しく建築された。ガラス張りの明るく開放的な空間にデスクやテーブル、椅子やソファを配置した設計が施されている。蔵書数は 177,862 冊、年間貸出冊数は 24,550 冊、年間入館者数は 154,096 人となっている（いずれも平成 27 年度）。



図2 7号館（図書館）外観



図3 図書館内観

3. 新たな役割を目指した図書館の運営について

前述のように平成 20 年に新しく建設された図書館ではあったが、その後の年間入館者数は伸び悩み、学内では図書館の活性化が議論されるようになっていた。また、大学や図書館をめぐる社会的環境が変化中、本学においても平成 24 年度より、図書館の利用を活性化し学習交流の拠点とするべく取り組みを進めるに至った。

はじめに、中心となって取り組む図書館の職員の意識をひとつにして組織的に取り組むことを目的に、平成 25 年度に以下のような部署目標を設定し、図書館運営全体の方向性を見直して主たる利用者である学生と教員への支援を具体化することとした。なお、この部署目標は平成 27 年度までの 3 年間に渡って設定することとなり、単年度の活動ではなく継続的なものとして試行錯誤も含めてじっくりと取り組むことができた。

【部署目標】

- ① 「図書館活性化」のために、主たるユーザーである学生に図書館を身近に感じてもらえるように工夫をする。
→ 学生にとって、場所として存在として身近な図書館になる。
- ② 「図書館活性化」を教育面から促進するために、教員との連携を進める。
→ 教員に頼りにされる図書館になる。
- ③ 上記目標を達成するために、図書館業務の改善と図書館職員の意識向上を図る。
→ 職員が自信を持って業務を楽しめる図書館になる。

この部署目標に基づいた具体的な取り組みとして代表的なものを以下に紹介する。

4. 図書館 twitter の運用

平成 24 年 7 月から開始した図書館の twitter は、部署目標①とした身近な存在としての図書館となることに大きく貢献した。開始当時すでに多くの大学図書館や大学自体で twitter が運用され、在学生あるいは受験生への情報提供活動を行っていた。ほとんどの学生がスマートフォンを所持し、SNS による情報収集やコミュニケーションを行っていることから早期に取り組み対象として検討した。そして、いくつかある SNS の中から、大学生の利用割合が高く、運用や利用が比較的容易かつ無料である twitter を選択した。

本学図書館の twitter の特徴は、開館スケジュールや新着図書案内を発信するだけでなく、学生とのコミュニケーションに重点を置いているところである。そのため、フォローしてくれたアカウントは積極的にこちらからもフォローして相互フォローの関係となる。そして、twitter を介しての学生からの問い合わせにも回答し、また図書館に関する学生間のコミュニケーションに対してもコメントを発したりしている。

運用開始から 1 年近くとなった平成 25 年 6 月にはフォロワーが 1,000 人となり、平成 28 年

8月現在では約2,600人となっている。これは学生数3,800人ほどの本学としてはかなりの学生からのフォローがあり、感覚値ではあるが学生の3人に1人はフォローしていることになる。

問い合わせやコメント発信は他の学生の目にも触れることとなり、図書館がこれまでの堅苦しい存在ではなく、気軽にコミュニケーションできる存在であることが浸透していると感じられる。実際、学生のtweetの中には「図書館」を話題にしたものも多くなってきており、図書館での企画展示や運用などを介したコミュニケーションが発生していることが分かる。話題は柔らかいものから、図書や情報を探しているようなものまでであるが、ネットから始まる学習交流拠点の可能性を感じている。

なお、本学図書館のtwitterの運用についての詳細は、参考文献⑤を参照のこと。

5. 図書館内での継続的な企画展示の実施

さらに、部署目標①の基本的な活動として、図書館での企画展示を年間を通して継続的に展開してきた。当初はありあわせのテーブルに本を並べることから始めたが、平成27年度に館内の改装工事を行い、専用の企画展示エリアを設置した。

企画の内容は図書館独自の企画と学内の他部署との連携企画の2種類がある。図書館独自企画では、例えば「出会い系図書館」と題した大学生活における学習・生活・危険など様々な変化への心構えを伝える新入生向けの“大学生活入門”、レポート・論文の書き方、就活・キャリア支援など学生生活での必須活動を支援するものを定番メニューとしている。加えて、時事問題や本学の専門分野とは異なる理工系の話題などを柔軟に取り込んだ教養的な企画を並行させている。また、他部署との連携では、講演会などイベントが開催される際に担当職員や講師によってリストアップされた関連書籍を展示している。展示期間はイベントの前後1ヶ月程度と長期にできるため、イベント前の事前学習やイベント後の振り返りなども十分にでき、相乗効果や部署間の連携の向上にも役立っている。

企画展示はポスターを学内に掲示して広報することに加えて、前述のtwitterでも情報発信するようにしている。twitterはリアルタイムにその都度情報を伝えることができる。このように、図書館内の取り組みに終わらせず、積極的に図書館外にいる学生に伝えることでより効果が上がる結果となる。



図4 企画展示エリア

6. 教員へのインタビュー活動

部署目標②の代表的な取り組みとして紹介したいのは教員へのインタビュー活動である。教員との連携、教員の理解という言葉は大学で多く聞かれる言葉だと思われるが、実際に活動に移している事例は多くはないのではないだろうか。本学図書館でも取り組みの検討はしていたものの実行はできていなかったが、平成28年度前半に8人の教員にインタビューを行い、意見交換をすることができた。

本学の専任教員は215人（2016年度）と大学の規模に相当して決して多くはないが、日頃から教員と頻りに特に図書館の運営や教育や研究活動についての会話ができる訳ではない。さらに、全ての教員を対象にインタビューを行うことは物理的に無理なので、適切な人数を選んで行わざるを得ない。その際に教員との距離を縮めるために効果的に働いたものは、図書館で行っているガイダンスや情報検索講習会であった。特に1年生の必須科目である授業「基礎演習」で図書館・情報検索の時間があり、すべての授業において図書館の職員が担当して説明を行っている。この際のやり取りや説明内容について教員との話す機会を築いていたと言える。また、平成27年度中に他部署が中心となってFD活動の一環として行われていた授業見学に参加できたことも良いきっかけであった。

インタビュー自体については、教員から頼りにされる図書館になるためには、何が望まれているのかというニーズを確認する必要がある。一方で、図書館サービスの主な対象者である学生に対する学習支援を視野に入れると、教員から学生への指導に図書館の活動を含めてもらうことも伝える必要がある。インタビューに当たって、図書館の自己紹介とも言えるパンフレットを用意した。これは、授業支援と研究支援に分けて図書館が教員向けに実施・提供しているサービスメニューを列記したものである。これを見せながら、知っているか、使ったことがあるかなどを聞くことから始めることができた。さらに、授業において重視しているポイントや図書館に対して期待していることを聞いていった。

その後、インタビューを行った教員からは、データベース講習会の要請や学生用図書のおすすめなども多くなり効果を実感している。さらに回数や対象教員を増やすことで、図書館からの授業支援、研究支援、さらには学習支援の質を向上できると考えている。

7. 学習交流拠点へ向けた成果

図書館の職員は、これらの取り組みにおける成果を日々の運営においては肌で感じることができているが、経営層や学内他部署への説明においては定量的な数値をもって伝える必要がある。ここでは、年間の入館者数をひとつの例とする。

平成20年に新しい図書館となったものの、年間の入館者に目立った増加はなく平成24年度まではほぼ横ばいの状態だった。しかし、平成24年度から本稿で紹介した事例を中心に取り組みを行ったところ、平成25年度には30%増加の163,934人と30%の増加となった。

その後も平成24年度の124,947人と比較すると約20%増加の15万人台を維持している。

これは図書館が学生にとって身近な存在となり「学習の場」として認知されたことに他ならない。利用する学生が増え、図書館内で学習する姿を見ることでさらにその範囲が広がることになり、学習交流拠点として運営する基盤となると考えている。

そして、図書館を運営する職員としては単に入館者数の増加を喜ぶのではなく、そのニーズに応えさらに質の高いサービスや業務を提供していくことに方向を向けていくことになる。

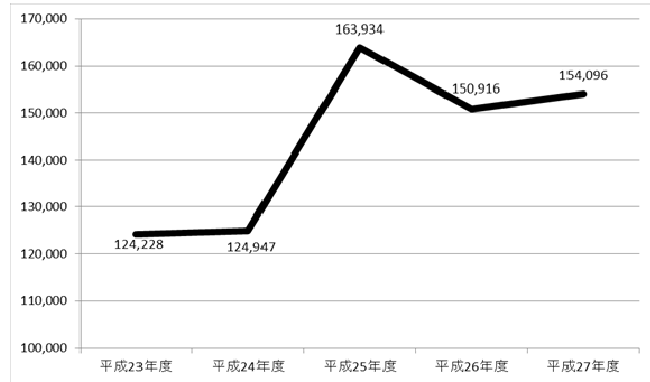


図5 年間入館者数の推移（再掲）

8. 神田外語大学の自立学習施設の役割

本学の教育の大きな特徴とも言える、学生が自ら積極的に学ぶ「自立学習」を支援するという考え方にに基づき、図書館以外にも自立学習施設と呼ばれる施設が複数設けられている。

SALC (Self-Access Learning Center) は、英語の「読む、聞く、書く、話す」力を効果的に鍛えることができる施設で、ラーニングアドバイザーと呼ばれる専任アドバイザーが常駐し、学生一人ひとりに合った学び方をサポートしている。特に、自分に合った学習プログラムを組み立てる手助けをしてくれる独自の教材である「MODULE (モジュール)」を開発し、自分に合った場所や時間を自分で選んで学習を進める8週間完結型の自立学習パックとして提供している。

また、MULC (Multilingual Communication Center) は、本学の英語以外の専攻言語をカバーした7つの言語エリアで構成され、各々の生活文化を代表する街並みや建物が再現されている。各言語エリアにはそれぞれのネイティブ教員が在籍し、豊富な書籍やCD、DVD、衛星放送、さらに留学生との交流など現地さながらの外国語環境にひたり、異文化コミュニケーション力を身につけることができる。

図書館の学習交流拠点としての役割は、これら学内の自立学習施設との協調と連携、そして分担の中で明確にしていくことになる。SALC および MULC では、外国語による会話を中心に教員や学生との課題解決が行われることから、いわゆるラーニングコモズ的な機能も兼ね備えているといえる。そのため、図書館においてはラーニングコモズを設置せず、一人がけの閲覧席を多く配置し、個人での学習を中心にレポートのような会話以外の授業課題や広く教養を身につけられるような支援を行っている。

なお、SALC をさらに進化・拡張した施設として、2017 年春にオープンする 8 号館を現在建設中である。

9. 今後の課題などについて

ご紹介した取り組みなどにより、図書館を利用する人数は確実に増えてきた。学習交流拠点となるためには来館して学習へのメリットが享受できる場として、入館者数は確実に増やさなければならない。一方で、電子ジャーナルや電子書籍、そしてインターネット上の情報資源も増え続ける状況で図書館に来なくても学習・研究活動に必要な情報を得られるようになり、いわゆる非来館型サービスの充実も行わなければならない。来館型のサービスと非来館型のサービスの共存と連動は、柔軟な発想で取り組むべき課題であると認識している。

また、図書館が学習交流拠点となることは、在学中の全体的な学習効果を向上させ、キャリア形成へとつなげていく視野が必要となる。本学でも今年度、大学 IR 業務を担当する IR 推進室が正式に組織され、筆者は IR 推進室課長も兼任している。図書館の入館や貸出し状況のデータを分析し図書館の業務に活かすことはもちろんだが、入試や就学状況そして就職までの学生の全学的なデータと合わせて分析することも可能であり、それは大学と図書館の双方にとって良い方向性を見出すことができると考えている。

最後に、当然ながらそれぞれの大学には建学の精神や様々なミッションやポリシーがあり、図書館での取り組みはこれらのミッションを見据え、ポリシーに沿って行うべきである。はじめに述べた大学図書館の役割の見直しと変革は必要であるが、特に私立大学の場合はその大学の方向性に沿うものでなければ個体の活動として空転するばかりで総合的な成果は望めない。これまでの図書館の運営体制によっては、この認識を改めて持つことが重要な点であると考えている。図書館の役割の見直しと変革を進めるには、この認識のもとに具体的かつ実践的な対策を速やかに決定し推進できるような体制で臨むことをお勧めしたい。

(参考文献)

- ① 文部科学省 大学図書館の整備について（審議のまとめ）－変革する大学にあって求められる大学図書館像－平成 22 年 12 月 http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/gijyutu/gijyutu4/toushin/1301602.htm
- ② 文部科学省 大学図書館における先進的な取り組みの実践例－大学の学習・教育・研究活動の質的充実と向上のために－平成 23 年 12 月 http://www.mext.go.jp/b_menu/shuppan/sonota/detail/1314091.htm
- ③ 文部科学省 大学図書館における先進的な取組の実践例（Web 版）最終更新日：平成 28 年 6 月 1 日 http://www.mext.go.jp/a_menu/kaihatu/jouhou/1341375.htm
- ④ 神田外語大学：ビジョン・ミッション／ポリシー <http://www.kandagaigo.ac.jp/kuis/about/vision/>
- ⑤ 吉野 知義. SNS を使った学生とのコミュニケーション（全国研修会報告 利用者とのコミュニケーションを考える）. 短期大学図書館研究. 2014, 34, 127-132 <http://id.nii.ac.jp/1092/00001291/>
- ⑥ 神田外語大学：附属図書館
大学サイト <http://www.kandagaigo.ac.jp/kuis/facilities/bldg7/library/> 図書館サイト <http://kuis.libguides.com/>
- ⑦ 神田外語大学：SALC（Self-Access Learning Center）<http://www.kandagaigo.ac.jp/kuis/facilities/bldg6/salc/>
- ⑧ 神田外語大学：MULC（Multilingual Communication Center）
<http://www.kandagaigo.ac.jp/kuis/facilities/bldg7/mulc/>